

現代青年の道徳性について

—認知欲求とセルフ・モニタリング傾向からの検討—

泉水清志

概要

道徳性研究において、道徳的発達と認知的発達は密接に関連しているといわれている。認知構造の発達と同じように道徳性の発達も起こり、さらに認知発達が進むにつれて道徳性の発達も進んでいくというものである。一方、社会心理学における説得研究において近年応用されているものに、「精緻化可能性モデル(ELM)」がある。これは、その動機づけと情報処理能力(認知欲求)によって態度変容の方略が異なるというものである。また、社会的状況における個人の行動を規定するものとして「セルフ・モニタリング理論」がある。これは、行動がその状況や他者の反応に基づいて行われるか、自己の内的状態や態度に基づいて行われるかには個人差があるというものである。本研究は、道徳性の発達段階と認知欲求、セルフ・モニタリング尺度を測定することによって、その関連性を検討した。

1. 問題

1) 道徳性と認知的発達

道徳性(morality)は「行為の選択が善意の基準に基づいて行われるとき、その行為の質が道徳性といわれる。道徳教育との関連においてみれば、人間らしい良さ、すなわち道徳的価値が個々の人格に結びつき人格を支え、その中に生きて働くものとなっていることを意味する」と定義されている(新保, 1981)。つまり、人が社会に適応していくために、その社会の生活規範や価値基準といった文化—制度的価値体系を内面化し、それを基準として行為の善悪を判断し、自ら進んでその判断を実行に移そうとする行動体制のことである。

道徳性の認知発達理論とは、道徳性が年齢とともに発達し、それは基本的には一般的な知的発達と同様であると仮定するものである。Kohlberg(1969)は、道徳的な判断や推論、認識(公正、正義に対する見方、考え方)が変化することを道徳性の発達と定義している。同じ行為であっても、なぜ正しいのかという理由が道徳性の発達という

観点から分析するとまったく異なるのである。この発達理論はPiaget(1930)の認知発達説に基づいている。彼によると、現在のスキーマ(概念)と環境とのあいだに不均衡状態が生じたとき、これを解消するために個人は環境に働きかけ、その情報を自分のスキーマに取り込もうとする(同化)。または、既存のスキーマを変化させ、環境に合わせようとする(調整)。認知的発達とは、この「同化」と「調整」によって個人と環境との相互作用を均衡化させていく過程から生じ、認知構造が次の段階に発達していくと考えられている。

この認知構造の発達と同じように、道徳的発達も道徳認知の不均衡から起こるとされている。つまり、子どもがモラルジレンマ(価値葛藤)の状況に直面すると、不調和や矛盾を感じ、認知的不均衡が生ずる。このとき、それを均衡状態にするために自分の考えを変えたり、調節したりする動機が生まれる。特に、自分の道徳的認知よりも一段階上位の道徳的思考に出会うと、均衡化のためにスキーマを調節するように動機づけられ、道徳性の発達につながるとされている。彼は10歳から16

歳の子どもにモラルジレンマ課題を提示し、正しさ（正義もしくは公正）という視点から人間同士の対立する権利や義務の問題をどのように解決するかを調べ、表1のように道徳的発達段階を三水準6段階に分けた（荒木,1987）。

この道徳的発達と認知的発達は重要な関わりを持つと考えられている。道徳的判断や道徳的推論は、認知構造、特に認知的推論の形式に依存するとされている。論理的推論の新しい構造が獲得さ

れると、それによって高次の道徳的判断を行うことが可能となる。すなわち、新しい論理的推論を行うことによって、以前の段階では見られなかった道徳的判断が下されるようになる。このことから、認知能力の発達と結びついて道徳性も発達すると仮定され、その実証的研究も行われている（Walker,1980;Kohlberg,1987）。

荒木（1990）は、認知能力を「世界を知り、自分と世界との間の適応をはかる知的な能力であ

表1 Kohlberg による道徳性発達段階

水準Ⅰ 前慣習的水準

この水準では、何が善で何が悪か、何が正しく何が間違いか、を示す文化上の規則やことばに敏感に反応する。しかし、それらの意味を行為がもたらす物理的、快楽的な結果（罰や報酬の有無、親切にしてもらえ、してあげる）から解釈したり、権威ある人物の物理的な力という点から解釈する。

〔第1段階〕 罰回避と従順志向

罰を避け、権威に対し盲目的に服従することに価値がある。叱られなければ良いことになる。

〔第2段階〕 道具的相対主義、快楽主義志向

自分自身、あるいは他人の要求を道具的に満たす行為、つまり報酬を得るための手段としての行為である。常に物理的、実用的、快楽的な観点から解釈する。

水準Ⅱ 慣習的水準

この水準では、直接的で目に見える結果にとらわれることなく、その人の属する家族、集団、国家の期待に添うように振舞うことが価値であることとみなされる。このような態度は人からの期待や社会秩序を積極的に維持し、支持し、正当化し、そこに集まる人や集団に同一化していける態度である。

〔第3段階〕 他者への同調、「よい子」志向

良い行いというのは他人を喜ばせたり、助けたりする行為である。つまり、「よい子である」ということを承認されたいと願い、他者への同調を行う。調和の取れた人間関係を持つようになる。

〔第4段階〕 法と社会秩序志向

正しいことは法秩序を守り、権威を敬い、義務を果たすことである。社会システムが役割や規則を規定しており、疑問や矛盾を感じた場合にも社会から期待されるようにして、他人から非難されないように考える。

水準Ⅲ 慣習以降の自律的、原理的原則水準

この水準では、道徳上の原則を支持する集団や個人の権威を離れ、これらの集団への個人的な同一化とは別に、妥当性と適応性を持つような道徳上の価値や原則を定義しようとする努力がみられる。

〔第5段階〕 社会契約、法律尊重、個人の権利志向

正しい行為は、制度、規則に沿い、民主的に一致を得られるものと同時に、個人の「価値」や「意見」からも検討され、同意を得られるものである。これは、法律尊重だけでなく、社会的利益を合理的に考えるようになり、それに沿って法律を変えることができるという可能性を含んでいる。

〔第6段階〕 普遍的な倫理的原則志向

正しい行為は社会的原則に合致するだけでなく、論理的普遍性と一貫性に照らして自己が選択した原則に合うかで判断され、その中で良心が働く。法律が倫理的原則と合わないときには、自らの原則に従って行動する。他人の権利尊重を損なうことなく、自分の権利も尊重する。

表2 道徳性の発達と構造

認知能力	道徳性の発達	
	水準	段階
形式的操作	III 慣習以降の自律的、 原理的原則水準	6 普遍的な倫理的原則志向
		5 社会的契約、法律尊重、および個人の権利志向
	II 慣習的水準	4 法と社会秩序志向
具体的操作	I 前慣習的水準	3 他者への同調、「よい子」志向
		2 道具的相互主義、快樂主義志向
前概念的操作		1 罰回避と従順志向

る」と定義している。また、認知的な発達を「自分と世界との間に生じた矛盾や疑問、混乱、不整合といった不均衡な状態を子ども自らが行う自己調整によって解消することにより達せられる」とし、表2のようにまとめている。

2) 精緻化可能性モデル (ELM)

社会心理学における説得研究からよく応用されるものに、精緻化可能性モデル (Elaboration Likelihood Model; ELM) がある (Petty & Cacioppo, 1986)。

Petty & Cacioppo (1986) は、説得的メッセージを受けたときに、いろいろな情報を考慮したうえで、その内容をよく考えてから態度を変える場合 (中心的態度変化) と、あまり深く考えずに、直接的にはメッセージの内容に関係ない、相手の容姿や相手への感情などの周辺的な手がかりを参考に、短絡的に態度を変える場合 (周辺の態度変化) とがあり、前者の処理方略を「中心的ルート」、後者を「周辺ルート」と名付けた。その基準は、その人がどれだけきちんと考えようとしているかという情報処理に関する動機づけと、その際どれだけ考えられることができるかという情報処理能力であるとされている。この両者があるときには中心的手がかりを用いて精緻な情報処理を行うが、どちらか一方でもない場合は周辺的手がかりを用いて単純な情報処理を行う (図1)。特に、そ

の人が普段からどれだけちゃんと考えたり、それを楽しんだりする動機づけは「認知欲求 (Need for Cognition)」と呼ばれ、個人差があるといわれている。

3) セルフ・モニタリング理論

社会的状況における個人の行動には、さまざまな状況的手がかりに対する感受性で差異がみられるという考え方がある。Snyder (1974) は、このような状況的要因に対する反応の個人差を説明するために、セルフ・モニタリング (Self-Monitoring) という概念を提唱した。セルフ・モニタリングとは、「状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なのかを観察し、自己の行動を統制すること」と定義されている。また、個人の社会的行動は、外的な状況や対人場面における他者の反応などの外的要因、自己の内的状態・先有傾向・態度などの内的要因のどちらかに基づいて決定されるとし、個人差があるとされている。すなわち、セルフ・モニタリング傾向が高い人とは、外的要因に基づいて行動する傾向が強く、自己の社会的行動の状況的適切さについての関心が高いため、自己の行動を状況に応じて統制する傾向が強い。これに対し、セルフ・モニタリング傾向が低い人とは、内的要因に基づいて行動する傾向が強く、自己の社会的行動の状況的適切さについての関心があまり高く

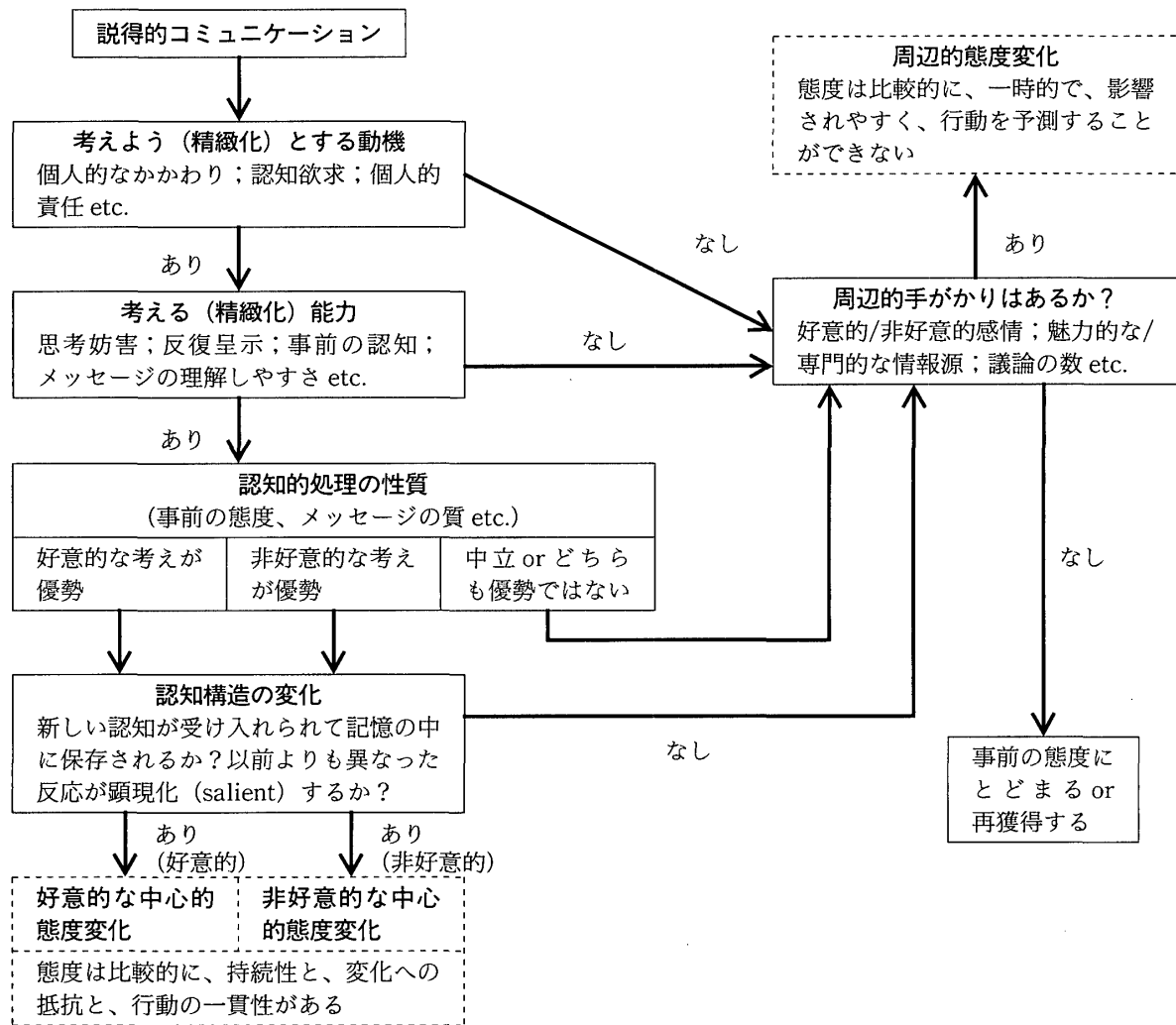


図 1. 精緻化可能性モデル (ELM)

ないため、自己の行動を状況に応じて統制する傾向は弱いとされる。

4) 道徳性の発達と 2 つの理論との関連

① 「精緻化可能性モデル」との関連

ELM と道徳性の発達を組み合わせると、高い道徳性の発達段階にある人は、普段の生活において ELM による「中心ルート」を用いて精緻に情報処理を行いやすい（認知欲求が高い）ために道徳性が発達したと考えられ、逆に低い道徳性の発達段階にある人は「周辺ルート」を用いて簡略に情報処理を行いやすい（認知欲求が低い）ために道徳性が発達しにくいと考えられる。

② 「セルフ・モニタリング理論」との関連

セルフ・モニタリングと道徳性の発達を組み合わせると、高い道徳性の発達段階にある人は、自己の行動の状況的適切さについての関心が高い（セルフ・モニタリング傾向が高い）ために道徳性が発達したと考えられ、逆に低い道徳性の発達段階にある人は、自己の行動の状況的適切さについての関心が低い（セルフ・モニタリング傾向が低い）ために道徳性が発達しにくいと考えられる。

よって、本研究は道徳性の発達段階と認知欲求、セルフ・モニタリング傾向を調査し、その関連性を検討することを目的とした。

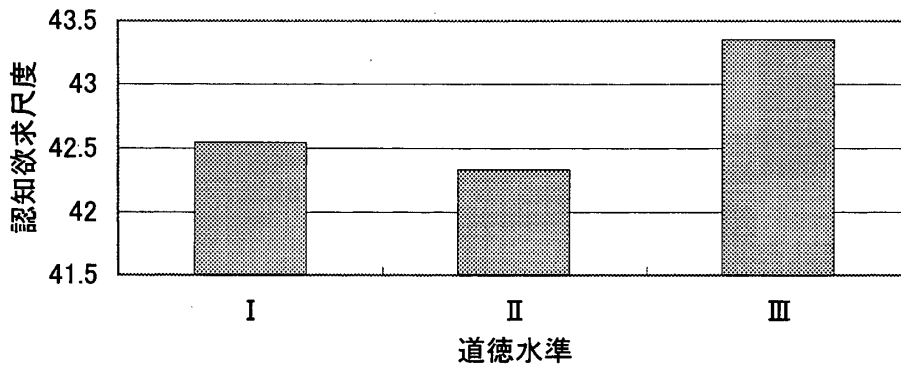


図2. 道德発達段階（水準）と認知欲求

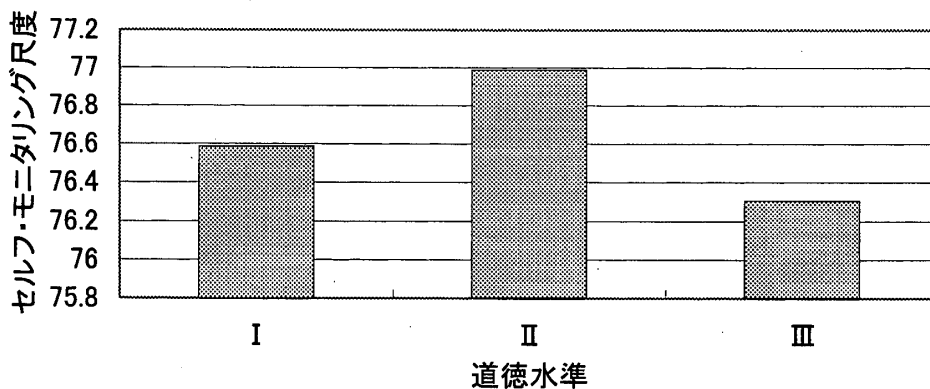


図3. 道德発達段階（水準）とセルフモニタリング

2. 方法

1) 調査対象者：群馬県内短大生558名（有効回答率79.2%）。

2) 調査内容・項目

- ① 認知欲求について：認知欲求尺度日本版15項目（神山・藤原，1991）について、「非常に当てはまる(5)」から「あまり当てはまらない(1)」まで、5段階尺度で評定を求めた。
- ② セルフ・モニタリング傾向について：セルフ・モニタリング尺度日本語版（岩淵・田中・中里，1982）について、「非常に当てはまる(5)」から「あまり当てはまらない(1)」まで、5段階尺度で評定を求めた。
- ③ 道德性の発達について：「モラルジレンマ物語」として作成された「これでよかったか」（荒木，1988）について、まず「賛成－反対」を尋

ねた。その後、その判断の理由として、道德性の発達6段階に沿い、代表的である考えられるものを提示し、その中から選択させた。その中にふさわしい理由がない場合には、自由記述を行わせた。なお、結果分析の際は、「どちらともいえない」や理由を自由記述したもののうち、道德性発達6段階のいずれに該当するかはっきりしないものは除いて行った。

3. 結果

1) 道德性の発達と認知欲求

調査対象者の認知欲求合計をKohlberg（1969）による道德性の発達段階3水準〔水準I（ $SUM = 42.53, SD = 7.46$ ）、水準II（ $SUM = 42.31, SD = 6.27$ ）、水準III（ $SUM = 43.33, SD = 8.09$ ）；図2〕ごとに一要因分散分析を行った結果、3水準の間に有意差はみられなかった。このことから、個人の認

知欲求と道德性の発達段階との間には関連がないことが示された。

2) 道德性の発達とセルフ・モニタリング

調査対象者のセルフ・モニタリング尺度合計を道德性の発達段階3水準〔水準I ($SUM = 76.57$, $SD = 8.05$), 水準II ($SUM = 76.98$, $SD = 8.71$), 水準III ($SUM = 76.29$, $SD = 8.93$) ; 図3] ごとに一要因分散分析を行った結果, 3水準の間に有意差はみられなかった。このことから, 個人のセルフ・モニタリング傾向と道德性の発達との間には関連がないことが示された。

4. 考 察

1) 道德性の発達と認知欲求

調査対象者の認知欲求合計を道德性の発達段階3水準ごとにまとめたところ, 図2より道德水準I, IIとIIIの間に差があるようにも思われるが, 水準ごとに一要因分散分析を行った結果, 3水準の間に有意差はみられなかった。よって, 認知欲求得点と道德段階の発達には関連性がないことが示唆された。この理由として以下のようなことが考えられる。

まず, 道德性の発達に関連する認知能力とELMにおける情報処理能力とは異なるものであったということが考えられる。これまでの道德性の認知発達研究はPiaget (1930) の認知発達説に基づいたものであった。この理論は, 子どもの認識や思考の発達に関するものであり, 年齢によって認知能力は発達し, 形式的操作期以降は成人と同じ認知能力とされている。これに対し, ELMや認知欲求においては普段の生活における思考方法, 動機ということを扱っている。発達していくものではなく, その場面における情報処理能力や動機づけを対象にしているのである。このことから, この両者の「能力」には違いがあるのではないだろうか。

次に, 本研究における質問紙構成の問題があげられる。従来の道德性研究において道德性の発達を調べる際, 「モラルジレンマ課題」を提示してその賛否理由を自由回答によって答えさせ, その回答から発達段階を測定するという方法が行われてきた。これに対し, 本調査では発達段階を明確に求めることを目的としたために, それぞれの発達段階の代表的と思われる理由を提示し, その中から選択させるということ方法で道德段階を測定した。そのため, 対象者は賛否理由があいまいであってもその提示されたものの中から選択することが可能であった。はたして, 正確な個人の発達段階がこの方法で測定できたのであろうか。各段階を選択した対象者数にかなりのばらつきがあったことや, 従来の研究では到達することが難しいとされている第6段階を選択した対象者が最も多かった一方, 第1段階を選択した対象者がより上位段階を選択した者より多数存在したことなども, この問題点を示唆しているともいえよう。今後, 道德段階の測定方法を改良して研究を行うことが必要ではないだろうか。

2) 道德性の発達とセルフ・モニタリング

調査対象者のセルフ・モニタリング尺度合計を道德性の発達段階3水準ごとにまとめたところ, 図3よりセルフ・モニタリング傾向は道德発達の水準IIにおいて高く, 水準I, IIIにおいて低いようにみられるが, 水準ごとに一要因分散分析を行った結果, 3水準の間に有意差はみられなかった。よって, 個人のセルフ・モニタリング傾向と道德性の発達との間には関連性がないことが示唆された。この理由としては以下のようなことが考えられる。

まず, 個人のセルフ・モニタリング傾向と道德性の発達には直接的, 単純な関連がないことが考えられる。一般に, 高いセルフ・モニタリングの人は外的要因に基づいた行動を取りやすいとされている。他者や状況に影響されやすいために他者

の高次の道徳基準に沿った判断や行動に影響され、自己の道徳段階もより高次に発達すると推測された。荒木（1988）は、子どもの道徳段階を発達させるためには「モラルジレンマ課題」を提示し、それに関して話し合わせ、自分より1段階高次の発達段階を持っている人の意見に接触することで道徳性が漸次発達するとされ、道徳教育においてはこのような手続きが最も効果があるとしている。日常生活においても同様に、高いセルフ・モニタリングの人は他者の高い道徳性に影響され、自己の道徳性にもプラスの影響を与えられることが推測された。しかし、逆に自己の道徳性が他者や状況に影響されて良いとされる道徳行動が取りにくくなり、道徳発達にもマイナスの影響を与えてしまうこともあるのではないだろうか。一方、低いセルフ・モニタリングの人は自己の内的状態、態度に基づいた行動を取るため、低い道徳発達段階の人は自己の考えによる判断を行うために道徳性の発達が阻害されると推測された。しかし、逆に高い道徳発達段階の人は周囲に影響されず、高次の道徳判断、行動をとることができることも考えられる。図3の結果は、この道徳発達段階（水準）とセルフ・モニタリング傾向との関連を示唆しているともいえる。道徳水準Iにおいては自己中心的な判断を下すので、内的要因を行動の基準とする低いセルフ・モニタリング傾向であり、水準IIでは他者志向的な判断を下すので、外的要因を行動の基準とする高いセルフ・モニタリング傾向となった。また、水準IIIは集団や個人の権威を離れた自律的な判断を下すため、最も低いセルフ・モニタリング傾向であったとも考えられる。統計的な有意差はなかったが、これらの間には何らかの関連性があるのではないだろうか。

また、セルフ・モニタリングは実際の社会的行動に影響を及ぼすとされているのに対し、本研究においてはある物語を読み、登場人物の行動に対する賛否判断理由から道徳性の発達を測定した。この実際の「行動」と仮定の「判断」という違いのため

に、セルフ・モニタリング傾向の高低による道徳性への影響が現れにくかったのではないかと考えられる。つまり、対象者にとっては本研究で用いられた「モラルジレンマ物語」は、あくまで「物語」に過ぎなかったのである。実際に経験するようなモラルジレンマ場面を仮定し、そこでの道徳性の判断理由を問うことで今回とは異なった、より現実的な結果が現れるのではないだろうか。

5. 結論

本研究は道徳性の発達段階について、ELMとセルフ・モニタリング理論との関連から検討することを目的として行われた。調査対象者に対し、モラルジレンマ課題を提示して道徳性の発達段階を調査し、それとともに認知欲求尺度、セルフ・モニタリング尺度を測定した。道徳性の発達段階（水準）ごとにその合計をまとめたところ、それぞれの合計得点平均から道徳性の発達段階によって認知欲求の高さや、セルフ・モニタリング傾向が異なる傾向が多少みられたものの、一要因分散分析を行った結果、いずれにおいても有意差はなかった。今後は道徳性測定方法、実際場面に即したモラルジレンマ課題の改良などの問題点を改善するとともに、道徳性の発達において認知的能力とともに影響を及ぼすとされている「役割取得能力」の観点からも検討することが必要であろう。

引用文献

- 荒木紀幸 1987 生きる 荒木紀幸(編) わたしがわかる・あなたがわかる心理学 6章 ナカニシヤ出版, 206-240.
- 荒木紀幸(編著) 1988 道徳教育はこうすればおもしろい 北大路書房
- 荒木紀幸 1990 ジレンマ資料による道徳授業改革: コールバーグ理論からの提案 明治図書
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリン

- グに関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6, 184-192.
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence : The cognitive-developmental approach to socialization. In D.A. Goslin(Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago : Rand McNally, 347-480.
- Kohlberg, L.& Higgins, A. 1987 Moral stages and moral education. 岩佐信道 (訳) 道德性の発達と道德教育 コールバーグ理論の展開と実践 広池学園出版部, 59-143.
- Petty, R.E.& Cacioppo, J.T. 1986 *Communication and persuasion : central and peripheral routes to attitude change*. New York : Springer-Verlag.
- Piaget, J. 1930 *Le judgement moral chez l'entant*. P.U.F
大伴茂 (訳) 1977 ピアジェ臨床心理学説III 児童道德判断の発達 同文書院
- 新保信一1981 新版心理学事典 藤永保・他 (編) 平凡社
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Social and Personality Psychology*, 30, 526-537.
- Walker, L.J. 1980 Cognitive and perspective-taking prerequisites for moral development. *Child Development*, 51, 131-139.

(2004年9月30日受付)
(2004年11月8日受理)

The Morality of Modern Adolescence

—The Examination from Need for Cognition and Self-monitoring—

Kiyoshi Sensui

Abstract

In the study of "morality", it is said that the moral development closely relates the cognitive development. Similarly, moral development happens with cognitive development, and it also advances in the same way. On the other hand, in the study of persuasion on social psychology, "Elaboration Likelihood Model; (ELM)" is applied to it these days. This is the model that processes of attitude change are different from that of motivation and information processing ability (Need for Cognition). Furthermore, "Self-Monitoring theory" is widely stipulated as the individual behavior in social situation. This is the theory that is different from our behavior based on the situation and other reaction, and on self states and attitudes. The moral developmental states, such as need for cognition, and self-monitoring scale, were measured in this study, and those relationships listed above were closely examined.